

第2章 計画地の現状

第1節 巢山古墳を取り巻く環境

広陵町は、奈良盆地の中西部にあり、東西約4.5km、南北約6.0kmで、総面積は16.3km²ある。東は三宅町および田原本町、南は橿原市および大和高田市、西は香芝市および上牧町、北は河合町と接している。町の東部には平坦地が広がり、西部は逆に丘陵地帯となっている。町内を縦断して高田川と葛城川、曾我川が北に向かって流れる。

奈良市からは直線距離で約20km、近畿圏の中核都市である大阪市から約30kmの位置にある。市内唯一の駅である近鉄箸尾駅は急行や特急の停車駅でないものの、道路網が発達したため大都市近郊の良好な環境の住宅地として近年まで人口増加が続いた。平成30年には微減傾向に転じたものの、町としては奈良県で最も人口が多い。



図 2-1 位置図 [出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

広陵町は、箸尾駅を中心として発展してきた北部地域、靴下産業が息づく西部地域、川の周囲に整然とした田園風景が広がる東部地域、閑静な住宅街が広がる真美ヶ丘ニュータウン地域と、大きく4つの地域に分けられる。

築山古墳の位置する西部地域には多くの古墳が点在し、歴史ロマンあふれる景観が広がる。四季の花と緑が美しい町民憩いの場である広々とした敷地の竹取公園、真美ヶ丘ニュータウンを南北に走る緑豊かな遊歩道であるかつらぎの道もあり、暮らしの中で自然を感じることができる町である。

また、古くから木綿で栄え、素材である綿花の産地でもある。江戸時代には大和木綿の産地として知られた広陵町は、明治末期には機織りに代わる仕事として靴下製造を始め、日本一の靴下生産地である奈良県の中核産地となるなど、町の個性を生かした産業が発展してきた。

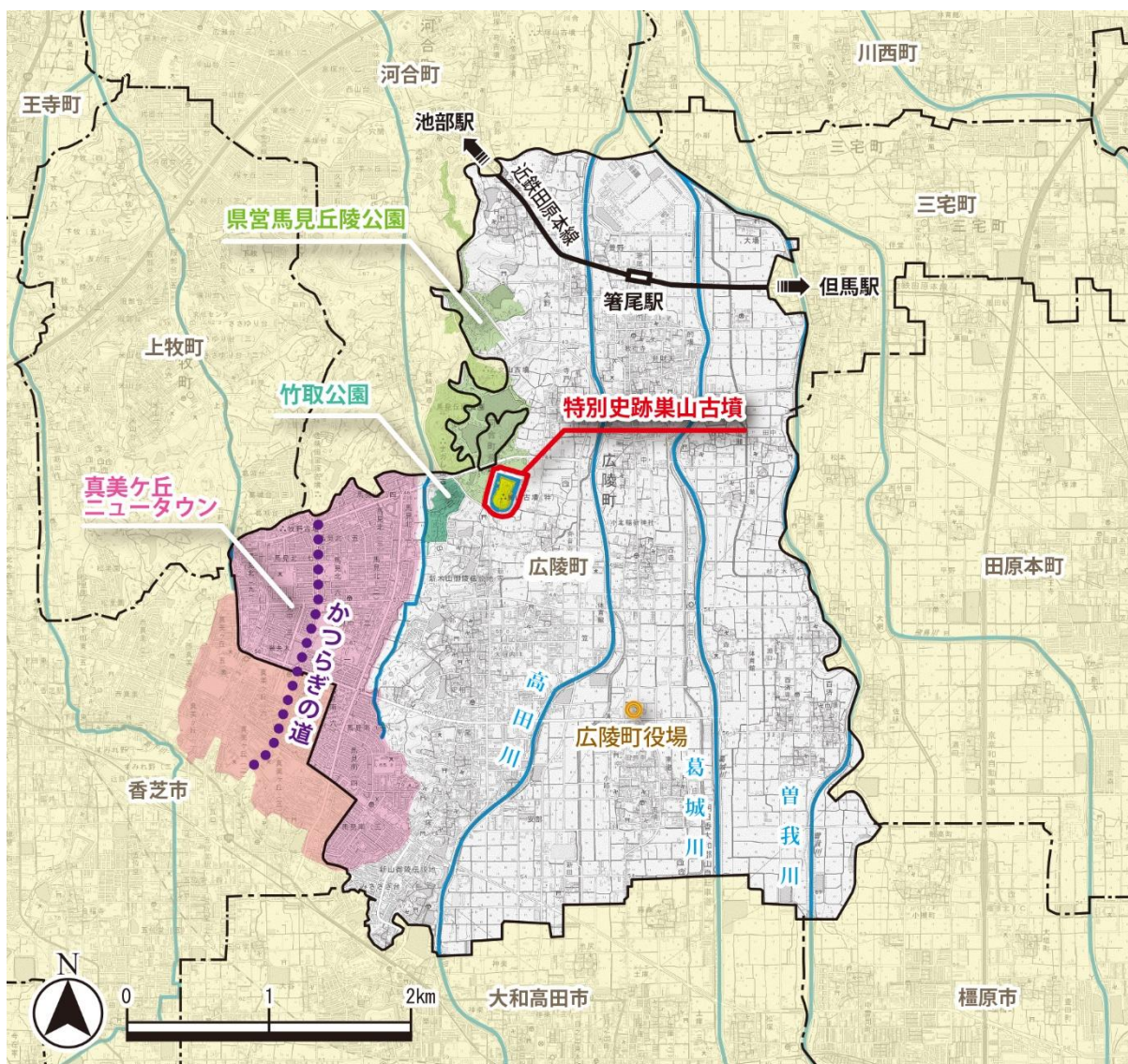


図 2-2 町域図 [出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

第2節 自然的環境

(1) 気候

山地に囲まれた奈良盆地に位置するため、近畿中部特有の内陸性気候であることから概ね温和であるが、気温は寒暖の差がやや大きく、降水量が比較的少ない。

町内には気象庁の観測地点が無いいため、広陵町から最も近い位置で気温と降水量を観測している奈良地方気象台における2020年と1981～2010年の平均値を比較したものを下図に示す。2020年の降水量は、過去30年間の平均値と比べて7月と10月がとくに多く、11月と12月は逆に少なかった。気温は8月がもっとも高く、2020年の平均気温は25℃を超えた。

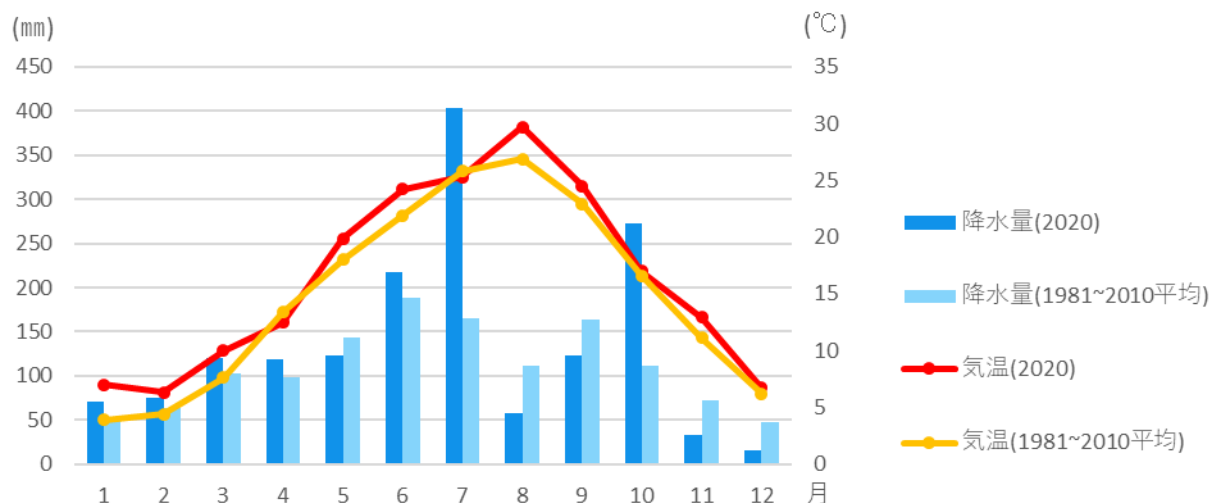


図 2-3 2020年の奈良市の気温と降水量

[出典：気象庁ホームページ]

(2) 地勢

町域の中央部から東部にかけて農地を中心とした平野部が広がり、西部一帯は起伏の緩やかな馬見丘陵となっている。馬見丘陵の東側に点在する古墳及び池沼等により形成される県の代表的な景観であることから、奈良県自然環境保全条例に基づき景観保全地区に指定されるなど、歴史と自然が融合する広陵町を代表する景観となっている。

水辺環境として、町内には高田川、葛城川、曾我川などの一級河川のほか、多くの河川が流れている。これらの河川は、雨水の排水だけではなく、農業用水としての機能や、住民の憩いの場となる親水空間や遊歩道として機能するなど、住民の生活に身近な存在となっている。

広陵町の地形は、奈良盆地の一角を占める東部低地と、馬見丘陵の一部である西部丘陵に分けられる。東部低地は、高田川と葛城川、曾我川の堆積地である。高田川は、葛城山の東北麓から流出し、大和高田市街地の西を流れて本町域に入る。葛城川は金剛葛城山地の東麓から流出し、御所市街地を流れて本町域に入る。曾我川は、竜門山地北麓から流出し、橿原市域を流れて本町域に入る。これら三つの河川は直線状に北流しているが、かつては流路の変化を繰り返し、自然堤防の微地形を形成して曲流していた。奈良盆地は低平な河川合流地域であり、本町域もしばしば水害にみまわれた。

馬見丘陵は東西約3.5km、南北約7.5kmの洪積台地で、比高は30～40mあり南から北に向かって緩やかに傾斜している。丘陵には侵食による影響で多くの谷が形成され、樹枝状に発達している。

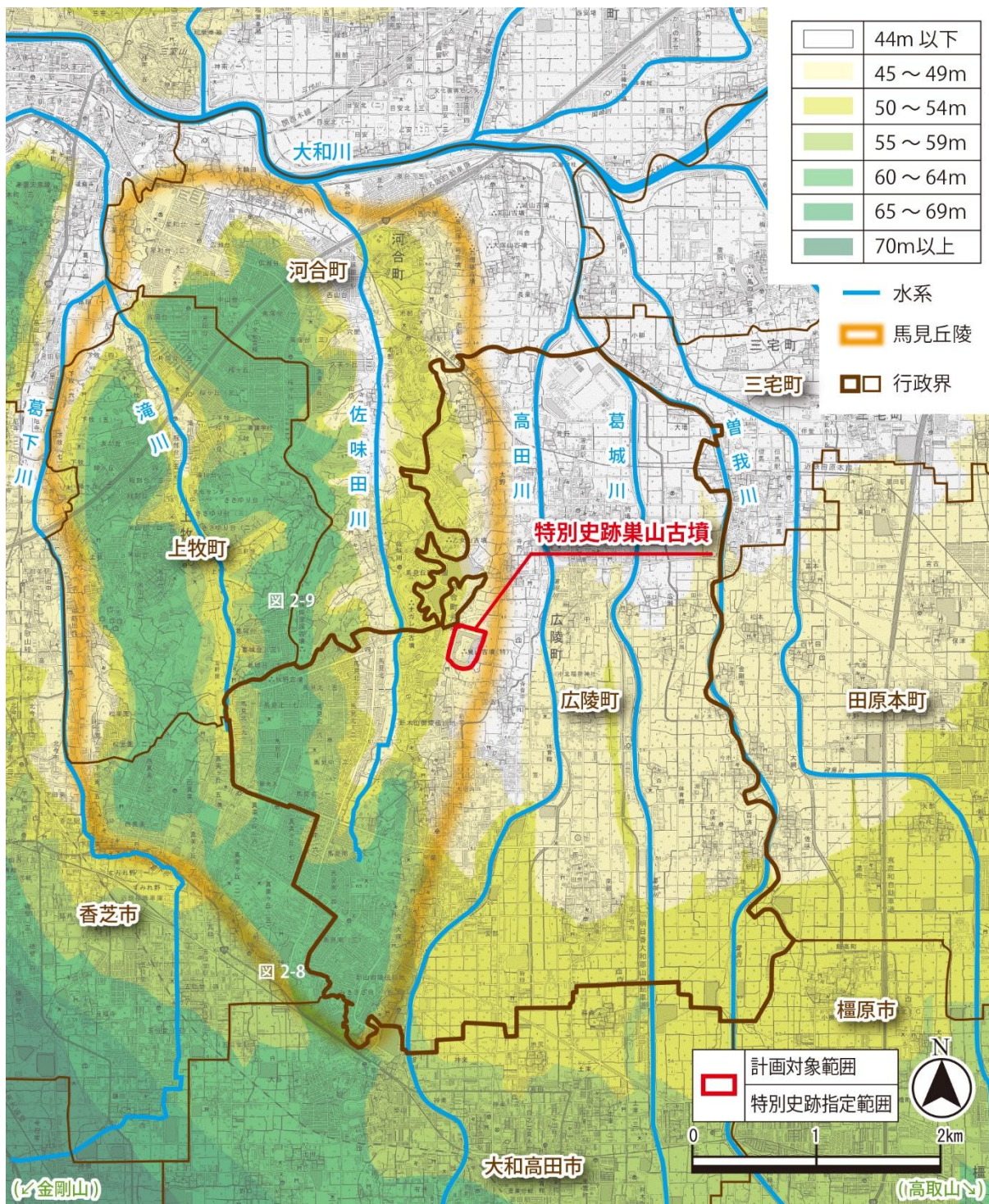


図 2-4 地勢図 [出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

第3節 歴史的環境

(1) 広陵町の歴史

広陵町の歴史は古く、町北部にある箸尾遺跡では旧石器時代の石器が発見されている。縄文時代後期（約4,000年前）以降は箸尾遺跡、古寺タム口遺跡をはじめ、多くの遺跡が町内で発見されている。弥生時代中期までは馬見丘陵の東斜面に遺跡が営まれ、後期になるとその数は増大していった。曾我川流域を基盤とする集落等が出現し、低湿地部の開発が進んだことがうかがえる。奈良盆地南東部に大和王権が成立した古墳時代には、王権を構成した有力豪族の奥津城として馬見丘陵に数多くの古墳が造られた。

町の西部に広がる馬見古墳群は、2市3町に跨る丘陵地一帯で200基余りの古墳が築かれており、その中でも最大規模で馬見丘陵の中央部に位置するのが巢山古墳である。馬見丘陵に古墳が築造された4～5世紀、この地は有力な地方豪族「葛城氏」の支配下であり、葛城氏の繁栄と衰退とともに古墳の規模も変遷を遂げたという説もある。

古墳時代後期から奈良時代には敏達天皇系の勢力基盤となり、百済大井宮、その子の押坂彦人大兄皇子の成相墓と考えられている牧野古墳、孫の舒明天皇の百済大宮・百済大寺が相次いで造営される。

平安時代、大和国内には15の郡があり、そのひとつが広瀬郡で、現在の広陵町域と河合町によって構成されていた。広瀬郡は東部が平坦な平野で、比較的早くから開発された水田地帯である。この地の大部分は国司が直接支配する国衙領であったが、国衙領内に次々と荘園が設定されていた。この土地でもっとも代表的な荘園は、もとは摂関家領、後に興福寺一乗院領の荘園となる平田荘と長川荘で、特に平田荘は室町時代の資料によれば2295町余りあり、広瀬郡から葛下郡・忍海郡・葛上郡にまたがり、日本各地の荘園でも最大級のものであった。

平安時代後期から大和国は実質的に興福寺によって支配され、興福寺は大和の国司でもあり守護でもあった。中世武士は、土着していた土地を中心に直接農業経営に関わりながら勢力を伸ばし、周辺地域への支配力を浸透させ、その過程で荘園の荘官に任じられることで中央の政治勢力と結びついて政治的な支配力をさらに強めていった。広陵町域では箸尾氏が勢力を持ち、筒井氏と激しい戦いを繰り返した。

南郷地区や古寺地区には、中世に形成され、周囲を濠または堀でめぐらされた環濠集落が現在も残る。

戦国時代の終わりとともに、租税制度が厳しくなったこともあり、大和木綿や菜種、たばこ、茶等の自然条件を生かした特産品の生産、南郷池の築造など大規模な農業用水の確保・整備が行われた。近世を通じて生産力の進展をはかるために数多くの溜池が築造された。

明治時代後半からは、靴下・織布等の製造業が栄えはじめ、大正7年には北部に大和鉄道（現在の近鉄田原本線）が敷設され、箸尾駅が設けられた。

そして昭和30年に馬見町・瀬南村・百済村が合併して広陵町を発足し、翌昭和31年に箸尾町を編入、昭和32年に藤森、池尻が大和高田市へ編入合併されて現在の広陵町となった。



図 2-5 広陵町行政界変更図 [出典：『広陵町史』]

(2) 指定等文化財

広陵町内には多数の遺跡が分布しているが、中でも馬見丘陵部には、特別史跡巢山古墳や陵墓参考地等の多数の古墳が集中的に分布する。

また、町東部の平野部には、百済寺や与楽寺などの由緒ある寺社が立地し、堂宇や所蔵する仏像等が文化財に指定されている。

表 2-1 国指定文化財一覧

番号	種別	名称等	数量	所在地	指定年月日
1	特別史跡	巢山古墳 (古墳時代中期)	一基	広陵町大字三吉	昭和27年3月29日 平成元年1月9日
2	史跡	乙女山古墳 (古墳時代中期)	一基	広陵町大字寺戸、 河合町大字佐味田	昭和31年11月7日
3	史跡	牧野古墳 (古墳時代後期)	一基	広陵町馬見北8丁目	昭和32年6月19日
4	重要文化財 (建造物)	百済寺三重塔 (鎌倉時代後期)	一基	広陵町大字百済 百済寺	明治39年4月14日
5	重要文化財 (彫刻)	木造十一面観音立像 附 木造十一面観音立像 (鞠仏) 附 鞠仏内納入品 (奈良時代)	一軀 一軀 一括	広陵町大字広瀬 与楽寺	平成17年6月9日



乙女山古墳
[出典：広陵町 HP]



牧野古墳
[出典：広陵町 HP]



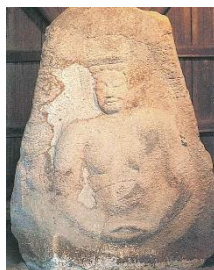
百済寺 三重塔
[出典：広陵町 HP]



十一面観音立像
(与楽寺)
[出典：広陵町 HP]

表 2-2 県指定文化財一覧

番号	種別	名称等	数量	所在地	指定年月日
1	史跡	三吉石塚古墳 (古墳時代中期)	一基	広陵町大字三吉	平成4年3月6日
2	有形文化財 (建造物)	教行寺本堂、対面所・書院 附 獅子口 附 文久境内指図 (江戸時代)	二棟 二個 一枚	広陵町大字萱野 教行寺	平成19年3月30日
3	有形文化財 (絵画)	板絵著色両界曼荼羅図 (室町時代)	二面	広陵町大字の場 大福寺	昭和61年3月18日
4	有形文化財 (彫刻)	木造十一面観音立像 難陀竜王像 雨宝童子像 (室町時代)	一躯 一躯 一躯	広陵町大字の場 大福寺	昭和42年11月25日
5	有形文化財 (彫刻)	石造浮彫伝弥勒菩薩坐像 (平安時代)	一躯	広陵町大字南郷	昭和54年3月23日
6	有形文化財 (彫刻)	木造十一面観音立像 (平安時代)	一躯	広陵町大字古寺 正楽寺	平成6年3月25日
7	有形文化財 (彫刻)	木造弘法大師坐像 (室町時代)	一躯	広陵町大字広瀬 与楽寺	平成7年3月22日



三吉石塚古墳

[出典：広陵町 HP]

弥勒菩薩坐像

[出典：文化財と自然
探訪マップ]

十一面観音立像

[出典：広陵町 HP]

十一面観音立像

[出典：広陵町 HP]

弘法大師座像

[出典：広陵町 HP]

表 2-3 町指定文化財一覧

番号	種別	名称等	数量	所在地	指定年月日
1	史跡	安部山古墳群 (古墳時代後期)	四基	広陵町馬見南2丁目	平成8年3月28日
2	有形文化財 (建造物)	百済寺本堂 (江戸時代)	一棟	広陵町大字百済 百済寺	平成10年3月18日
3	有形文化財 (彫刻)	木造毘沙門天像 附 像内納入印仏 (平安時代)	一躯 一括	広陵町大字南 長泉寺	平成10年3月18日
4	有形文化財 (工芸品)	黒漆塗春日厨子 (室町時代)	一基	広陵町大字広瀬 与楽寺	平成10年3月18日
5	天然記念物	八坂神社 ケヤキの巨樹	一木	広陵町大字古寺 八坂神社	平成8年3月28日
6	民俗文化財	大垣内の立山祭		広陵町大字三吉	平成8年3月28日
7	民俗文化財	天神社の綱打ち		広陵町大字広瀬 天神社	平成10年3月18日



安部山古墳群

[出典：広陵町 HP]



百済寺 本堂

[出典：奈良県歴史文化資源データベース]



ケヤキの巨樹(八坂神社)

[出典：文化財と自然探訪マップ]

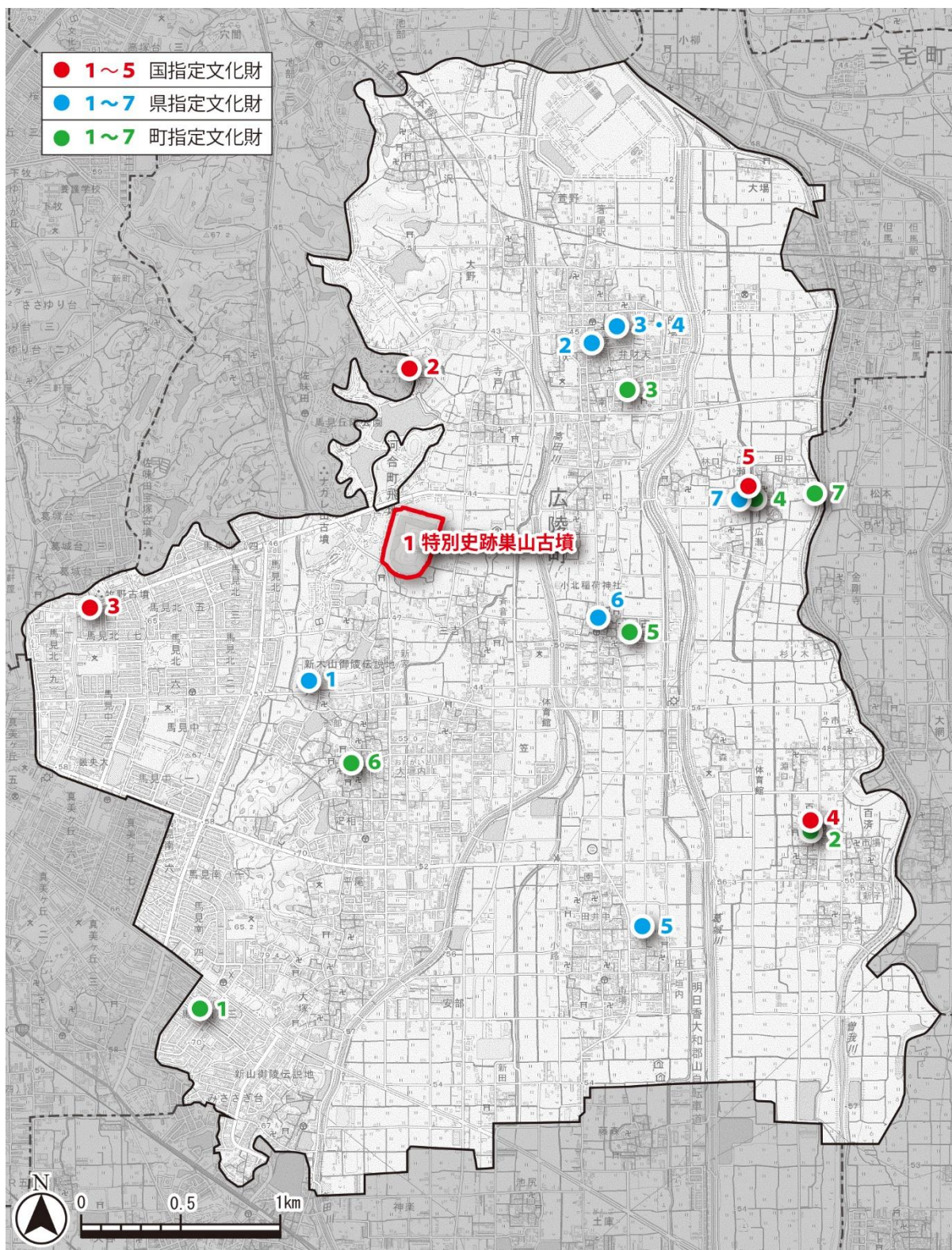


図 2-6 指定文化財位置図 [出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

(3) 馬見古墳群の概要

馬見丘陵を分断するように2本の大きな谷があり、ここに極めて細いが佐味田川と滝川が流れ、丘陵は三分されている。地理的には東側の丘陵、中央の丘陵、西側の丘陵の3つに分割して考えられる。南部は佐味田川と滝川も消え、丘陵が東西につながったようになっている。広陵町と河合町にまたがるこの低丘陵には多くの古墳が造られ、丘陵の名をとって馬見古墳群とよばれる。

この馬見古墳群は一般に、大きく「南群」「中央群」「北群」の3群に分けて理解されている。

古墳群を、墓域を共通とするひとつの集団、と考えた場合、この3群の分類では問題もあり、属性を分析してグループ分けが試みられてもいる（河上邦彦2002「馬見古墳群の基礎資料」）が、ここでは従来通りの3群として馬見古墳群を概観する。

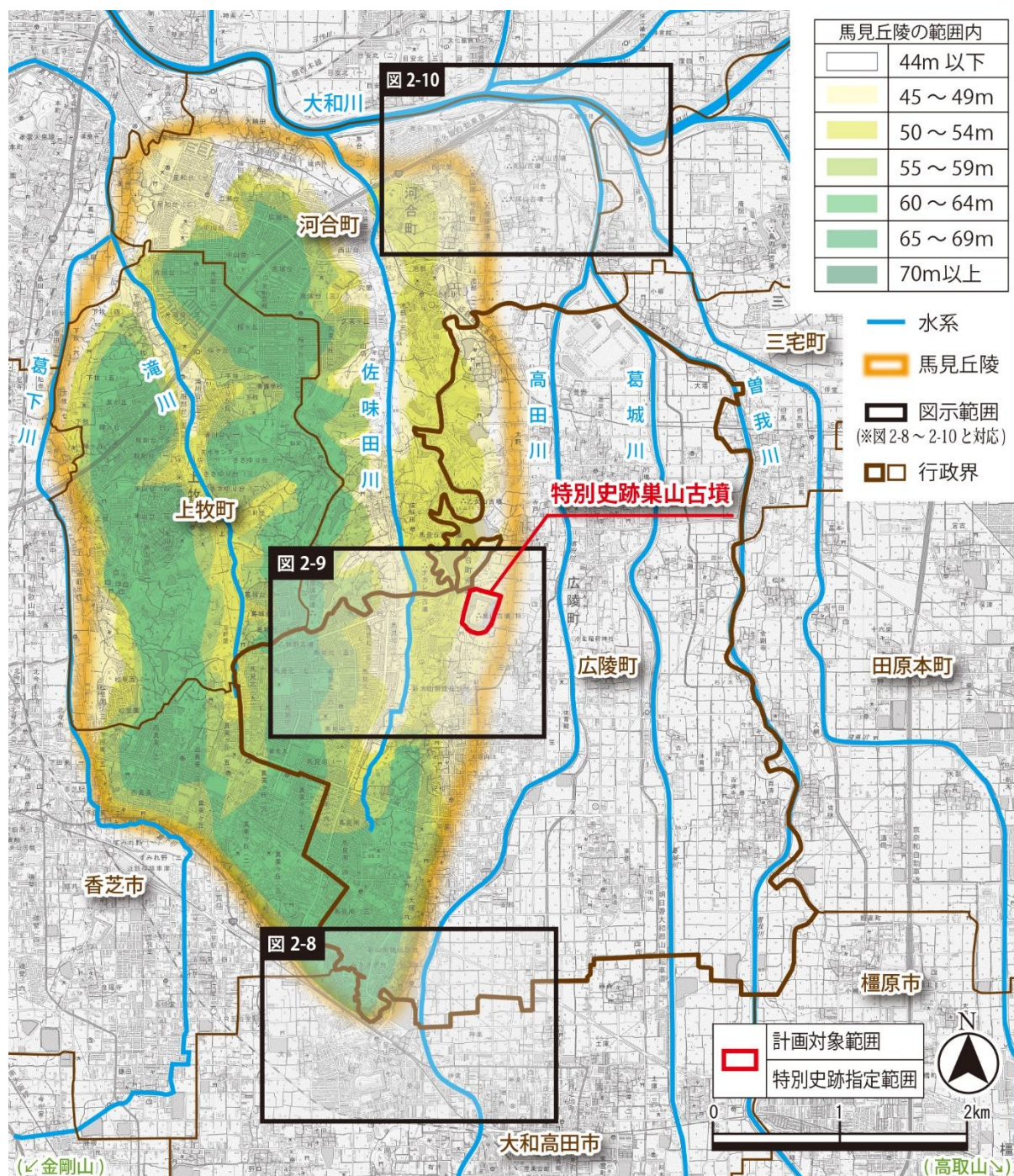


図 2-7 馬見丘陵地形図 [出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

◆ **南群：広陵町南西部から大和高田市北西部、香芝市東部**

丘陵の南端部の南群では、馬見古墳群中最古の前方後方墳である新山古墳が前期中葉に築かれ、周辺では小地域の首長墓として黒石5号墳が前方後方形を踏襲し、前方後円墳はモエサシ3号墳・黒石東2号墳が築かれる。後期には、これら前期から中期古墳が築かれた丘陵の周辺に円・方墳を営むものと、独立した丘陵上に築かれるものがある。前者は黒石古墳群で、後者には帆立貝式の於古墳と前方後円墳である安部山1号墳があげられる。

築山周辺では、全長210mの大型前方後円墳である築山古墳が中期初頭に築かれた後、中規模の前方後円墳である狐井塚古墳、大型円墳であるコンピラ山古墳が後続し、小規模な前方後円墳である大谷今池1号墳も築かれている。後期になると周辺に葬地を移し領家山古墳群、池田遺跡が営まれる。中・小規模古墳は、新山・築山古墳周辺で前期から後期まで連綿と続く。



図 2-8 南群 [出典：空中写真(国土地理院ウェブサイト)を加工して作成]

◆ 中央群：広陵町中央西部から河合町南部、上牧町南部

中央群で最も早く築かれるのは前期後葉の別所下古墳・ナガレ山北3号墳等の円墳で、後続する時期に佐味田川以西の丘陵内部に佐味田宝塚古墳・貝吹山古墳が築かれる。

中期初頭には周濠と外堤を備えた大型前方後円墳である巢山古墳が出現する。200mを超す大型前方後円墳である巢山古墳から新木山古墳が築かれるほぼ同時期に100m大の前方後円墳であるナガレ山古墳が造られ、後続して倉塚・一本松古墳、100m未満のタダオシ・大塚古墳が築かれる。帆立貝式古墳としては、巢山古墳と密接な関係をもつと考えられる狐塚・三吉2号墳に続き、中期前葉には乙女山・池上古墳が築かれる。ここでは、ほぼ同時期に同一古墳群中に格差をもつ古墳が存在し、これらの墳形・規模はそれぞれの古墳の被葬者の階層性を表すと考えられ、それが使用される円筒埴輪の法量にも反映することが明らかとなっている。ここに巢山古墳を頂点とする支配体制が確立したと考えられている。以後、それぞれの階層で二世代にわたって造墓が続けられた後この系譜は断絶し、前方後円墳は姿を消す。

中期後半には帆立貝式の三吉石塚古墳、方形の文代山古墳、円形の坊塚古墳が築かれ、カタビ古墳群・佐味田石塚古墳群等の小規模な古墳が数基単位で後期まで続く。後期後半には、三吉一番地古墳・ノノワ古墳群など墳丘盛土の痕跡のない古墳も築かれている。



図 2-9 中央群 [出典：空中写真(国土地理院ウェブサイト)を加工して作成]

◆ **北群：河合町東部から川西町、三宅町**

北群は中央群の大型前方後円墳の系譜が途絶えた後、丘陵東北麓、河合町河合付近に築かれる。中期後葉に全長197mの川合大塚山古墳が築かれ、中期末葉に100m級の前方後円墳である中良塚古墳、後期前葉の城山古墳へと続く。これらは奈良盆地のなかでも低平地に位置する代表的な大型古墳で、大和川が合流する地点にあり、流域を背景に成立する古墳という印象が強い。この立地条件は曾我川を挟んだ東南東1kmにある島の山古墳に共通し、馬見丘陵の中南部の古墳とは別系譜という考え方が示されている。



図 2-10 北群 [出典：空中写真(国土地理院ウェブサイト)を加工して作成]

※参考文献：奈良県広陵町教育委員会『橿山古墳調査概報』
河上邦彦2006『大和葛城の大古墳群 馬見古墳群』

番号	古墳名	墳形	時期	全長(m)		墳形	時期	全長(m)	
1	河合大塚山古墳	前方後円墳	中期後半	197	15	三吉石塚古墳	帆立貝式古墳	中期後半	45
2	河合城山古墳	前方後円墳	中期末	109	16	佐味田宝塚古墳	前方後円墳	前期後半	112
3	仲良塚古墳	前方後円墳	中期後半	88	17	佐味田貝吹山古墳	前方後円墳	前期後半	100
4	島の山古墳	前方後円墳	前期末～中期初頭	190	18	牧野古墳	円墳	後期後半	48
5	池上古墳	帆立貝式古墳	中期前葉	92	19	鴨山古墳	円墳	後期後半	
6	乙女山古墳	帆立貝式古墳	中期前半	130	20	於古墳	帆立貝式古墳	後期前半	37
7	別所下古墳	円墳		60	21	安部山1号墳	前方後円墳	後期	42
8	坊塚古墳	円墳		60	22	新山古墳	前方後方墳	前期中葉	126
9	一本松古墳	前方後円墳	中期	130	23	黒石5号墳	前方後方墳	前期	54
10	倉塚古墳	前方後円墳	中期前半	180	24	別所石塚古墳	前方後円墳	中期前半	100
11	ナガレ山古墳	前方後円墳	中期初頭	105	25	別所城山1号墳	帆立貝式古墳	中期	42
12	佐味田狐塚古墳	帆立貝式古墳	前期末葉	86	26	長谷山古墳	円墳		10
13	巢山古墳	前方後円墳	中期初頭	220	27	築山古墳	前方後円墳	前期末～中期初頭	210
14	新木山古墳	前方後円墳	中期前葉	200	28	狐井塚古墳	前方後円墳		75
					29	狐井城山古墳	前方後円墳	中期末～後期初頭	140

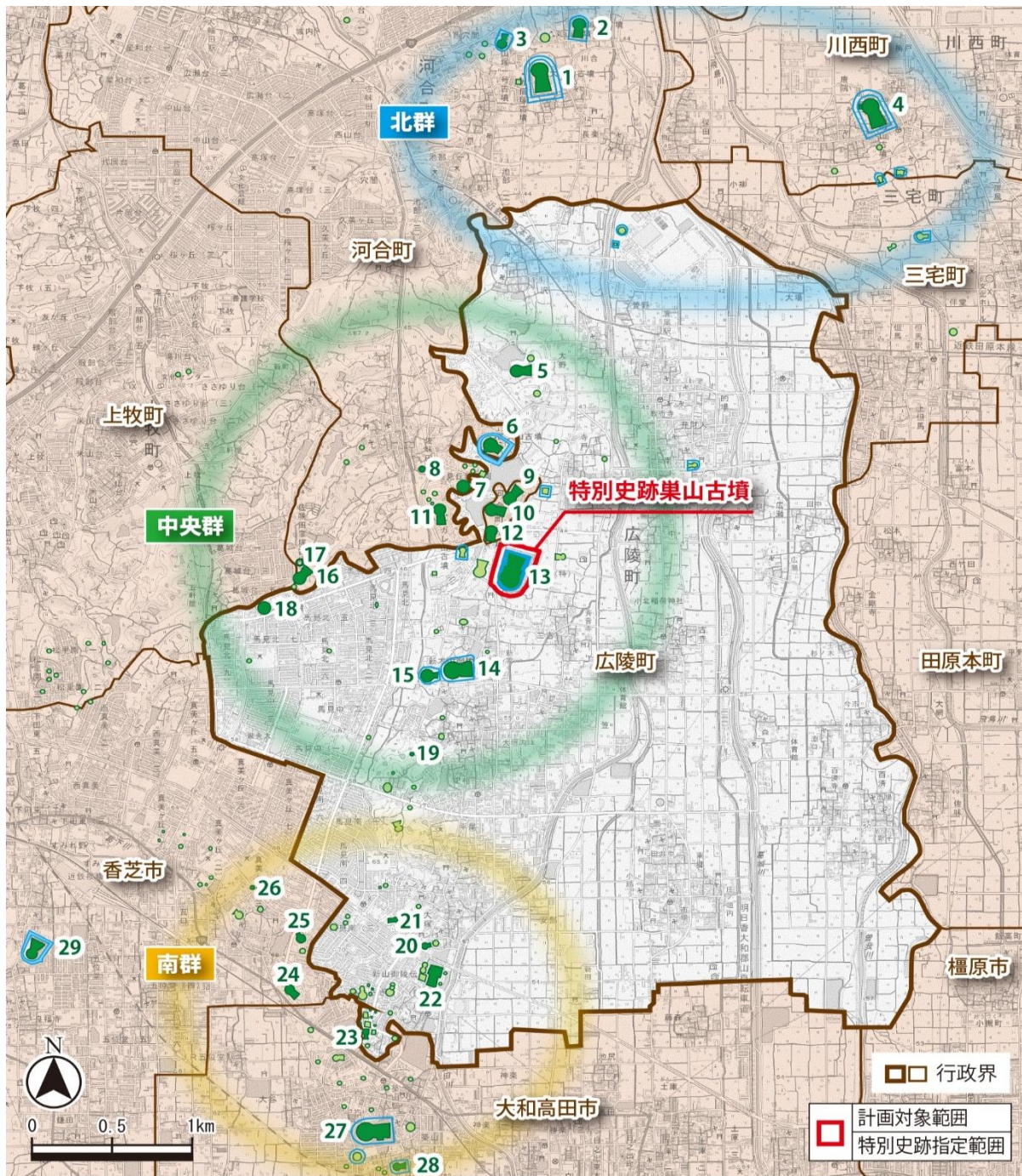


図 2-11 馬見古墳群分布図

第4節 社会的環境

(1) 人口

広陵町の人口は、令和2年(2020)6月末日現在で34,985人、13,306世帯と県内の町では最も人口が多い。高度経済成長により広陵町の人口も増加傾向にあったが、馬見丘陵における住宅開発に伴い、昭和58年(1983)4月に真美ヶ丘ニュータウンへの入居が始まって以降、急激に増加した。平成28年には35,000人に到達し、以降大きな増減はなく横ばい状態であるが、世帯数の増加は続いている。

広陵町には5つの公立小学校と2つの公立中学校があり、平成25年現在在籍する児童数は2,279名、生徒数は1,032名である。

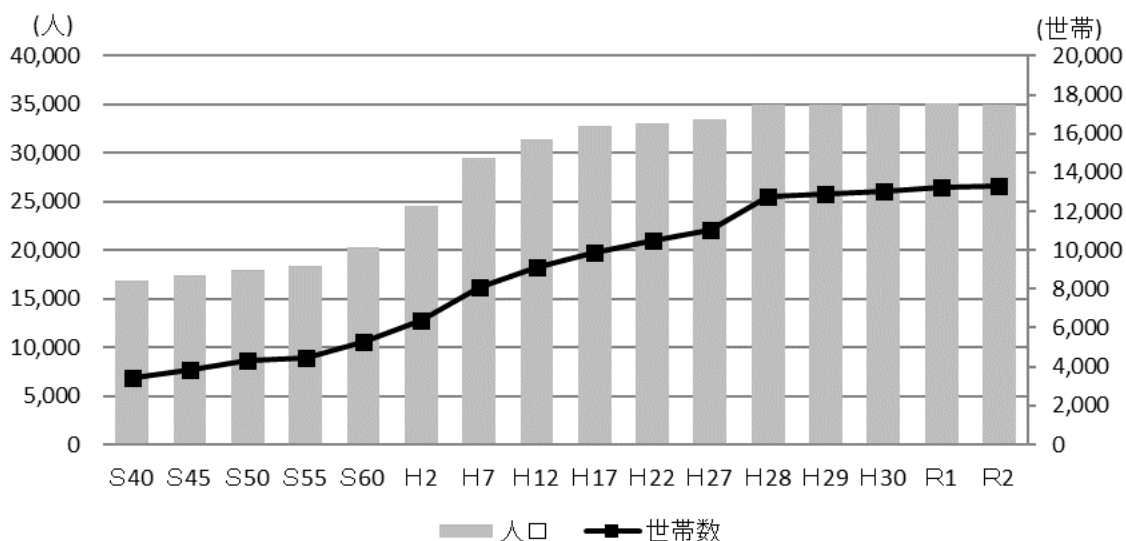


図 2-12 広陵町の人口・世帯数の推移 [出典：【S40～H27】国政調査データ
【H28～R2】広陵町ホームページの集データ]

(2) 道路・交通

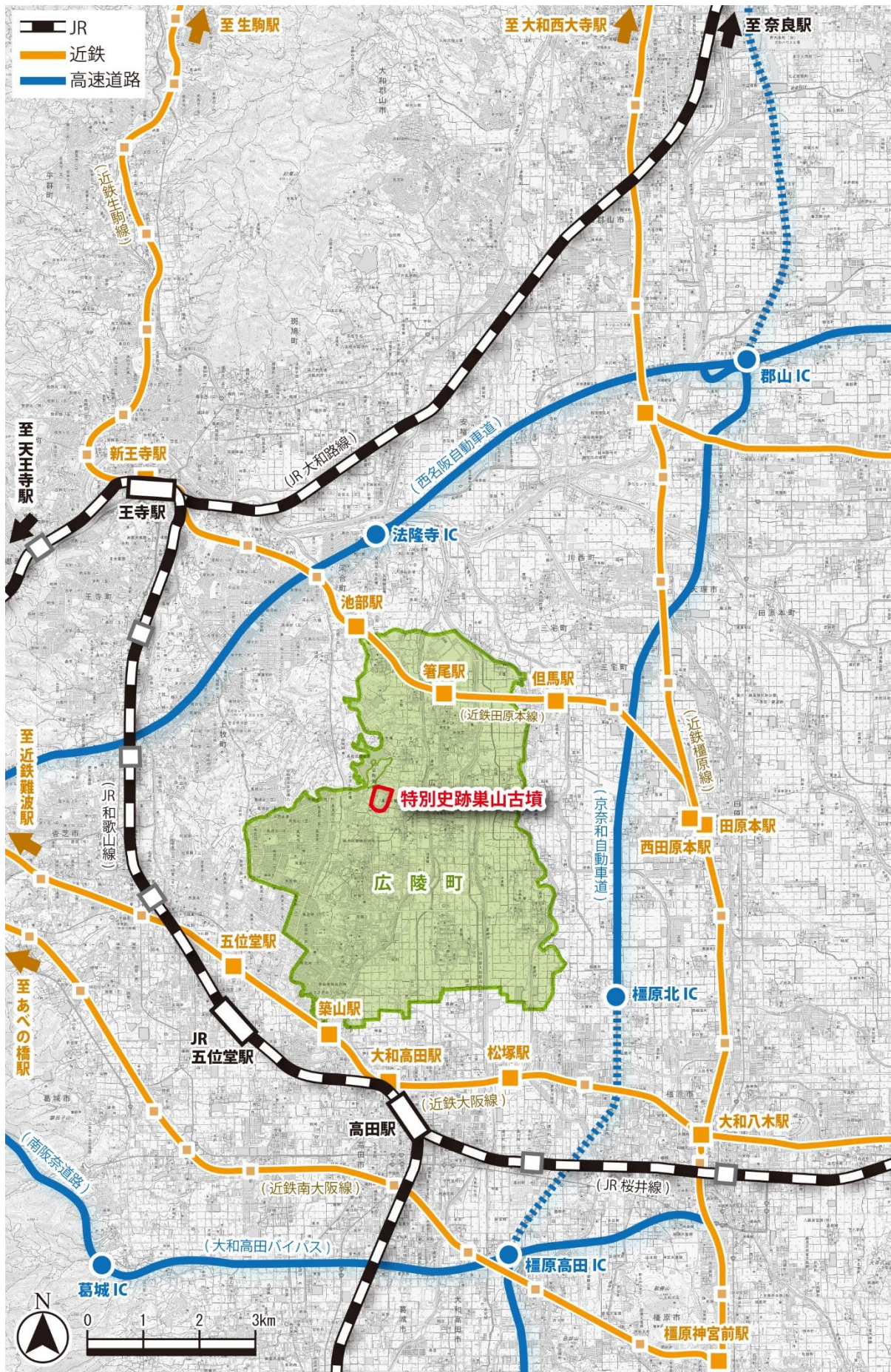
大阪市内まで電車、車ともに約40分で行くことができる。町の北部には箸尾駅があり、近鉄田原本線が通るが、地区によっては最寄り駅が町外の池部駅や但馬駅、また近鉄大阪線の五位堂駅・築山駅・大和高田駅・松塚駅となる。田原本線は上下それぞれ1日64本の電車が運行され、箸尾～西田原本を7分、箸尾～新王寺を15分で結んでいる。

主要地方道である大和高田・斑鳩線(県道5号)、桜井・田原本・王寺線(県道14号)、町道の柳板・大谷線、一般県道の田原本・広陵線(県道112号)および中和幹線(県道105号)は、近隣・広域市町村との連携を担うネットワークであり、また、町の拠点を結び、都市を支える骨格を形成する道路である(図2-14)。

また、町内には近鉄電車や奈良交通バス、町のコミュニティバスも運行しており、交通網が充実している。バス路線は真美ヶ丘ニュータウンを中心に五位堂駅や王寺駅、大和高田駅といった近隣市町へのアクセスとしても運行されている。路線バスの一部撤退を受けて平成21年運行を開始した乗合自動車「広陵元気号」は、平成23年に運行方式を定時定路線運行に変更し、さらに平成28年10月からは有料化して運行を継続している。

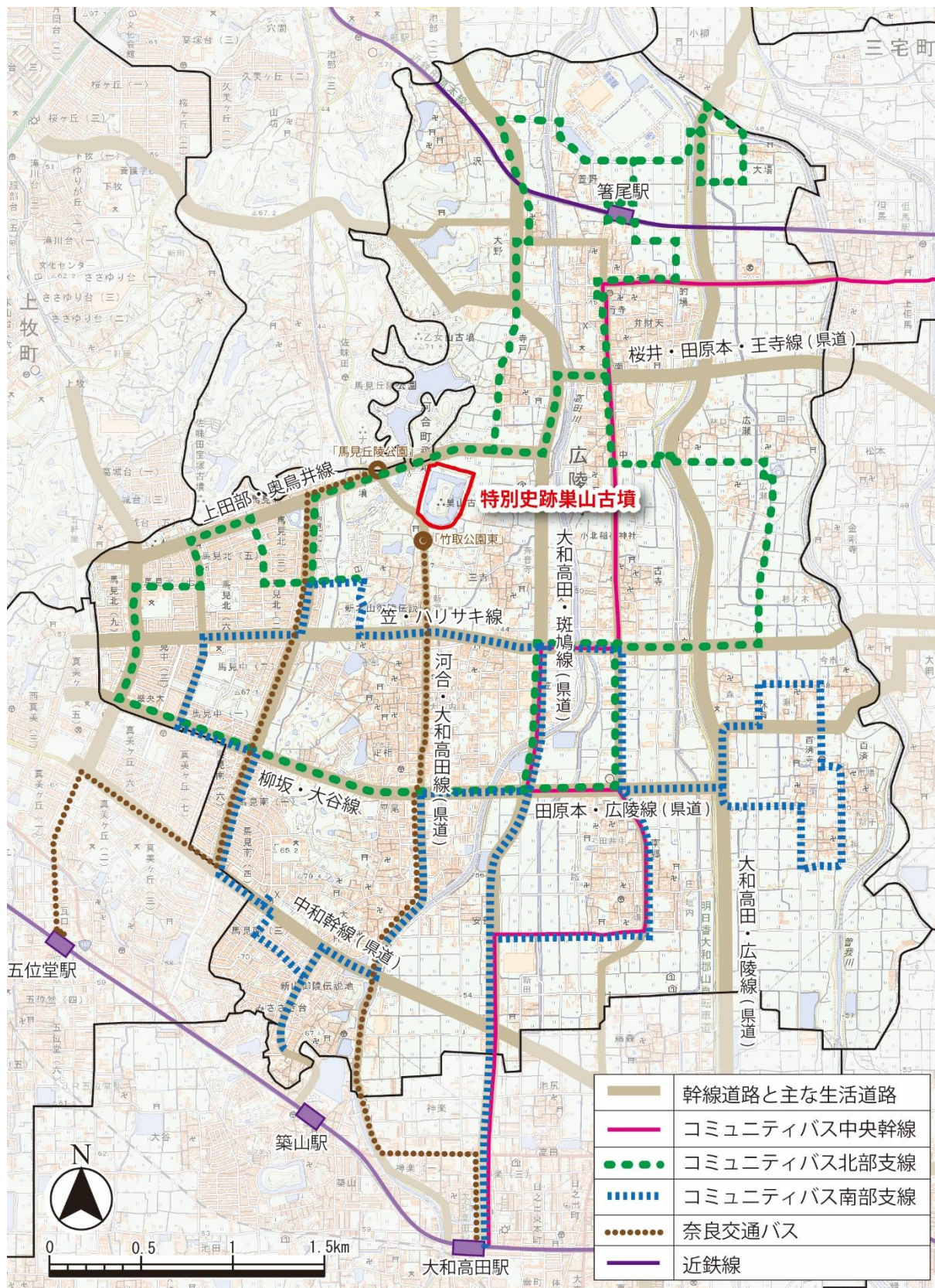
計画地と隣接する馬見丘陵公園や竹取公園へは、近鉄五位堂駅や大和高田駅から近鉄バスを利用する来訪者も多い。

[出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]



[出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

図 2-13 広陵町周辺の鉄道・高速道路等広域交通網図

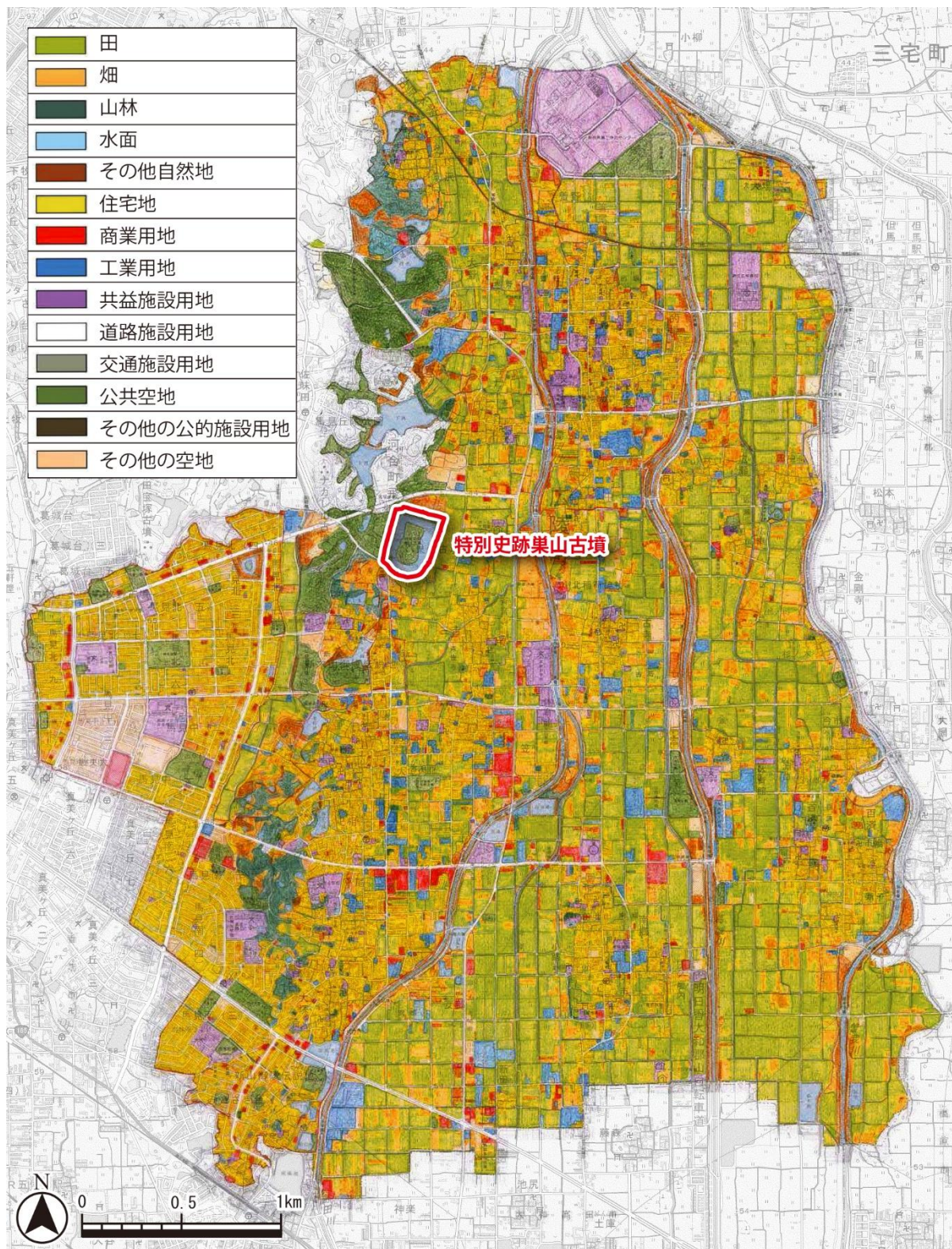


[出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

図 2-14 広陵町内の道路交通網図

(3) 土地利用

広陵町の土地利用は農地と宅地が中心である。農地は減少傾向にあるものの、市域の35%を占めている。その多くは田で町東部の河川周囲には整然とした田園風景が広がっている。一方、町西部の真美ヶ丘ニュータウン地域には閑静な住宅街が発展している。



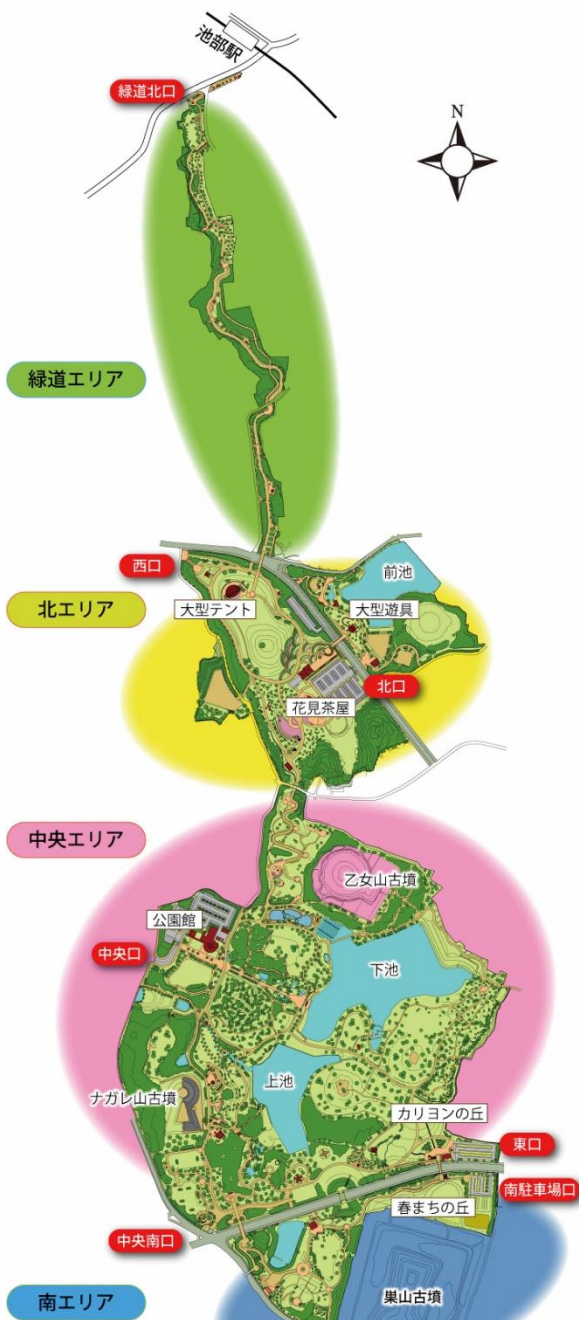
[出典：平成16年都市計画基礎資料を加工して作成]

図2-15 土地利用状況図

■ 県営馬見丘陵公園

昭和40年代後半より馬見丘陵西部では真美ヶ丘や西大和ニュータウンなどの大規模宅地開発が始まったことを受け、奈良県は丘陵東部において開発行為から自然や古墳群を守るため「歴史と自然に囲まれた憩いの空間」を目指し、昭和59年度(1984)より公園整備事業に着手した。平成3年に10haを開園して以来、順次供用を開始して、平成24年6月の中央エリアおよび南エリアの一部開園をもって整備が完了した。

馬見丘陵公園の南エリアは、巢山古墳よりも一段高い位置にあり、南端から古墳の西側を俯瞰することができる。また、中央エリアと南エリアを連絡する墳観橋^{つかみばし}からは、前方部を俯瞰することができる。



南エリアから墳丘西側への眺望



墳観橋から前方部への眺望

図 2-17 県営馬見丘陵公園

[出典：奈良県ホームページ]

■竹取公園

広陵町の北西部、真美ヶ丘ニュータウンと寺戸地区、馬見丘陵公園に隣接し、平成6年に整備された面積約6.5haの都市公園である。竹取公園に隣接する讃岐神社は竹取公園の「竹取の翁」が名を「讃岐造（さぬきのみやつこ）」ということから、これが大和国広瀬郡散吉郷のことであると、「竹取物語ゆかりの神社」と称されており、竹取物語をイメージしたものである。

園内にはみんなの広場やちびっこゲレンデ、ローラー滑り台などの遊具施設があり、多くの子どもたちが集い、近隣住民の憩いの場、健康づくりの場として利用されている。また大阪方面からの遠足の名所として有名であるとともに、広陵かぐや姫まつりや靴下の市などのイベント会場としても認知されている。公園周辺には、歴史資源および図書館があり、人が集まる絶好のエリアとなっている。



竹取公園正面入口



竹取公園駐車場

（5）法的規制

①文化財保護

広陵町内の指定文化財は「2-3-2指定文化財」に示した通りである。巢山古墳は、国の特別史跡に指定されている。

②都市計画

広陵町全域の1,633haが都市計画区域(市街化区域：459.1ha、市街化調整区域：1,173.9ha)に指定されている。巢山古墳は市街化調整区域に位置する。

地区計画においては、巢山古墳を含む竹取公園周辺が都市拠点、巢山古墳の北側を東西に走る町道上田部・奥鳥井線が都市軸に設定されている。隣接する馬見丘陵公園、竹取公園は都市計画公園である。

③農業振興地域・農用地

巢山古墳を含む市街化調整区域の殆どが農業振興地域として指定されている。

④奈良県景観計画

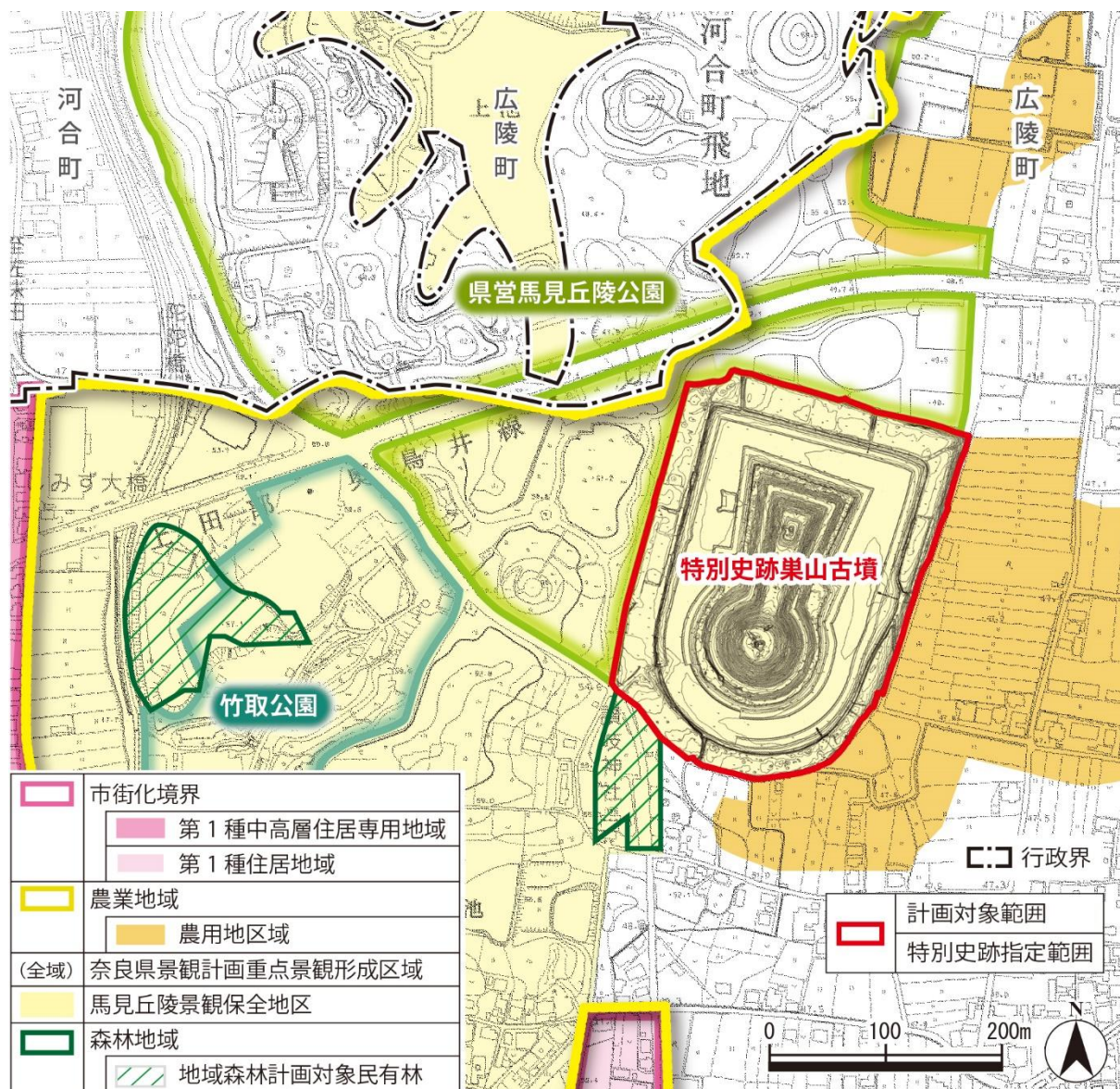
広陵町の全域は奈良県景観計画の景観計画区域に指定されている。中和幹線沿道は広域的・先導的な観点から特に重点的に景観形成に取り組むべき区域である重点景観形成区域の広域幹線沿道区域に、その他の区域は一般区域に指定され、良好な景観の形成に向けた行為の制限等が定められている。

⑤景観保全地区

重要な景観要素として機能している馬見丘陵地区は、景観保全地区として適切な保全が図られている。

⑥宅地造成工事規制区域

真美ヶ丘地域を含む広陵町西側の丘陵部については、宅地造成工事規制区域に指定され、宅地の造成等に伴う災害が発生しないよう、造成等を行う場合には技術的基準に合致した工事等が必要となる。



[出典：電子地形図(国土地理院)を加工して作成]

図 2-18 特別史跡巢山古墳周辺の法規制図

